

心理コーディネーターになるために Vol.23

山下桂永子

☆ある会議への参加



夏のある日の午後、いくつかのファイルをカバンに入れてから玄関へ。靴を履き替えて振り向き、事務所内に向かって「通級会議、行ってきまーす」と声をかけると、「いってらっしゃーい」の声を背後に聞きながら扉を開ける。

暑い。午後 1 時過ぎは、軽く 30 度を超えている。眼鏡を度付きのサングラスに付け替え、アームカバーにつばの広い帽子、日傘をさして坂を下る。駅前の市役所までは、行きは下りで 10 分。帰りは上りで 15 分。

汗だくで歩きながら、「えーと、会議では今月の報告と、A 小の B 先生にあれを伝えて、相談員の C 先生から渡されたメモについては、会議の前に D 中の E 先生をつかまえて伝えて、えーと……」などなど、今日の会議で伝えることを頭の中で反芻する。

13 時 30 分の会議開始 10 分前に、市役所の会議室に到着。そこで、いくつかの学校園の通級指導教室担当の先生方と情報共有をしているうちに、会議が始まる。

会議では、その月の教育センターのケース数や状況報告をして、各学校園からの報告や教育委員会からの報告を聞く。時にはコメントを求められて答えていると、あっという間に 1 時間の会議は、定刻を少し過ぎて終了。

学校園の先生方は、この後も別のテーマの会議があるため、5 分ほどの休憩の間に私は席を立つ。すると、F 小の G 先生から「山下先生、ちょっとだけいいですかね。～の件で」と声をかけられ、短い情報交換と打ち合わせができた。

そんなこんなで、14時45分に市役所を出る。

やばい。15時からある教育センターでの面接にギリギリだ。

緩急織り交ぜながらずっと続く坂を、小走りに駆け上がる。会議への出席なので、いつもよりややフォーマルを意識して羽織っているジャケットの下を汗が伝う。

きついし、暑い。

「さすが、住所に『山』がつくだけあるわ。隣に城があったぐらいの場所だもんな。自転車を借りればよかったかなあ。でも、帰りは自転車を押して上がるだけだから、余計にしんどいんだってば。ていうか、教育センターに通ってきてくれるお母さんたちは、この坂を、時には子どもを自転車の後ろに乗せて上がってきてくれるんだよなあ。しかも月に2回も。大変だよなあ」

などと考えながら、14時58分に滑り込みセーフ。

エアコンの効いた事務所でお茶を一口飲んで、なんとか一息ついてから面接に臨む。

☆会議に出るということ

この数年、ひと月に1回、市内の通級指導教室の先生方が一堂に集まる会議に参加させていただいている。



個別のケース会議と違って、何か意見や心理的な見立てを求められることは多くないし、必要な準備もそう多くはない。

では、退屈で時間の浪費になっているかといえば、そうではない。

普段なかなか会えない現場の先生方と会えるので、情報共有や打ち合わせなどのコミュニケーションが取りやすい。むしろ、私は積極的に参加させてもらっている。

実際にケースについてじっくり話し込むほどの時間は取れないものの、教育センターの教育相談について理解してもらうきっかけになったり、学校での支援の方向性や見通しなどを短時間で共有できたりする、貴重な時間にもなっている。

「会議に出る」というと、何か意見を求められたり、専門的な見立てを伝えたりすることをイメージするかもしれない。

でも、私にとって会議に出ることの一番の意味は、そこで先生方と「顔を合わせる」ことなのかもしれない。

☆会議に参加するまで



とはいえ、最初からすんなり参加できたわけではない。

当初、通級指導教室の会議に出席させてほしいとお願いした時、すぐには OK が出なかった。

会議では個人情報扱われることもある。そのため、学校園に所属しているわけでもなく、スクールカウンセラーでもない心理士が参加することを、「はい、どうぞ」というわけにはいかなかったのである。

そこで、教育センターの教育相談にとって、学校園の先生方と連携することの重要性や、心理の専門職として、その会議に参加することの意義を上司に説明していくことから始めた。

その後、上司から会議の開催元にも説明してつないでもらい、許可をもらって、開催元から会議参加の依頼状を出してもらって……うんぬんかんぬん。

と、いろいろやっている間に、結構な手続きと時間を要した。

「いや、なんでこんなに面倒なの？」と、チャレンジしたころは思っていた。

しかし、その過程で、いろいろな会議や行政の仕組みを知ること多かつたし、行政の面倒な手続きにも(是非はともかく)いろいろな意味があるんだなあ、などと思ったりもした。

そして何より、「参加したい」と思ったら、ただ待っているだけではなく、自分からその意味を説明し、周りの人に理解してもらうことも、心理職として大切な仕事なのだと気づいた。

☆つながるひと手間

そして最近では、通級指導教室に限らず、他の会議にもよく参加している。

生徒指導担当者会議、支援コーディネーター会議、市の福祉関係部署との心理職連携会議などなど。参加は年に数回のものから、月に1回程度のものまでさまざまである。

その都度、参加する意義の説明や手続きの手間は必要である。



でも、学校園の先生方と実際に顔を合わせて話をする、多くの気づきや学びがある。そして、そのことを教育相談に活かせる場面も多い。

会議というと、「情報を共有する場」「何かを決める場」というイメージがある。

もちろん、それも大切なものだけれど、私にとっては、それだけではない。

いろいろな場に出して、先生方と顔を合わせて、ちょっとした話をして、「また何かあったら、いつでも連絡くださいね。」と伝える。

そんな小さなやり取りの積み重ねによって、いろいろな場で教育センターの教育相談活動の内容を知ってもらうことができる。

そして、結果的には、そうやって教育センターについて現場の先生方が理解を深めてくださるなかで、学校園の先生方と教育センターとのお互いの信頼関係が、少しずつ積み上がってきている。

以前は、会議に参加するためにも、その都度いろいろな説明や手続きが必要だった。

それが今では、「教育センターの相談員の先生も来れますか」と声をかけてもらえたり、「このケース、教育相談につなげたほうがいいですかね」と気軽に相談してもらえたりすることも増えてきた。

会議への参加も、先生方との連携も、以前よりずっとスムーズになってきたという実感がある。

そう考えると、あの時「なんでこんなに面倒なの？」と思いながら始めたひと手間は、決して無駄ではなかったのだと思う。

心理コーディネーターの仕事は、相談室の中だけで完結するものではない。

時には暑い坂を上り下りしながら、会議に顔を出す。

そこで誰かと話をして、名前と顔を覚えてもらう。

そして、また何かあった時に「ちょっと相談してみよう」と思ってもらえる。

そんな一つひとつの「つながるひと手間」が、子どもたちや保護者を支えるための連携につながっていくのだと思う。

